

はしがき

編者は、長いようで短い自身の人生に加えて、他人の、しかも自身では経験できなかった、あるいはできない人生に自身の心を重ね合わせることができたら、どんなにか充実した人生を送れるのではないかと考え、2006年と2012年にさまざまな時と空間で活躍しておられる人たちの感性・人生観・世界観や技力などによって得た、他者とのコミュニケーションについて執筆していただき、『多次元のコミュニケーション』と『続・多次元のコミュニケーション』を上梓いたしました。これらの書籍は多くの方々にも読まれ、大学のテキストとして使用されたり、大学入試問題に引用されたりしてまいりました。

さらに2014年には、かけがえない、たった一つの小球体・地球上に同居する人類（ホモ・サピエンス）が平和を愛し、異民族の言語・文化・習慣・宗教などを相互に理解・尊重し、友好的なコミュニケーションを育むことができれば、いまだに残る「専制と隷従、圧迫と偏狭」から脱出できるのではないかと考え、外国に留学・ビジネスなどで比較的長期間滞在された、あるいははされておられる日本人の外国でのコミュニケーションの実態、逆に来日してさまざまな場面で活躍している外国人が日常感じ取る日本人とのコミュニケーション、さらに外国から留学生やビジネスマンを受け入れて、日本国内で外国人とコミュニケーションを実践しておられる方々に、日本人と外国人との異文化コミュニケーションの实態を紹介していた

き、そこから学ぶ「グローバルマインド」の構築について問題提起をしていただき、『異文化コミュニケーションに学ぶグローバルマインド』を上梓してきました。

これまでは国内・外のさまざまな場面でスポット的に交わされるコミュニケーションの実態を取り上げてまいりましたが、今回は人生を時間軸でとらえ、特に出生から生命をまっとうするまでの人生の中心で展開される「教育」を取り上げ、さまざまな時空間で展開される、教育する側（教え人）とされる側（学び人）とのコミュニケーションを通して、教え人から見た教育の現状と将来、教育はどうあるべきかについて語っていただき、教育とはどうあるべきか問題提起をしていただきました。そこには教える側の論理だけでなく、教えられる（学ぶ）側の感受・応答に対する配慮も重要であることはいうまでもありません。

日本人の平均寿命は近年の驚異的な医療技術や衣食住の発達によって、80歳を超えるようになりました。その約4分の1に相当する、出生から二十歳代前半までの期間は肉体的・精神的発達がもつとも著しく、いわゆる人生の絶頂期であります。この一生の中で最も大事な時期には、ほとんどの日本人は乳幼児に対する家庭教育に続き、幼稚園・保育園、小・中学校、さらに高等学校、大学、大学院といった学校教育の囲いの中に身を置きます。本能の赴くままに行動する「動物」から、理性・知性を備えた「人間」に進化させるための「教育」、将来社会の一員として貢献できるようにするためのさまざまな基礎知識・技術の教授等々といった「教育」が各ステージのエキスパートである教師（教え人）によってなされます。それぞれのステージにおける「教育」は単に学習課題が達成されれば終わりというものではなく、教え人の感性・人生観・世界観などを通して児童・生徒・学生（学び人）とのコミュニケーションが学び人の将来を左右しかねないこ

とからも極めて重要であります。

しかし一方、最近の教育現場では従来紙ベースであった教科書の電子化がささやかれるなど、IT化が急速に進んでいます。従来、企業が収益を上げるための武器として使われてきた顧客情報や社会情勢の変化など多面的で膨大なデータ「ビッグデータ」が教育の分野でも注目を浴びつつあります。学び人の日常的な学習に関する多面的なデータを収集した「教育ビッグデータ」を利用することで教育の改善・向上が期待でき、教育にさまざまな知見をもたらすことができます。さらに、数年後にスタートする新学習指導要領で、学び人が主体的に議論したり、発表する「アクティブ・ラーニング」の導入や、タブレット端末などのデジタル教材を導入していくといえます。「教育ビッグデータ」を利用した「IT教育」における教え人の役割は、学び人と直接対面するなかで、友好的なコミュニケーションを図りながら学習課題を教授するといった従来の「教え人」から、「教育ビッグデータ」に基づくIT教育の介添え人への変貌が求められ、そのための研修などが課せられるものと思われれます。IT化とともに育ってきた若い教え人は違和感なく対応できるでしょうが、年配の教え人の中にはとんでもない時代になったと精神的ストレスを感じ、後ろ髪を引かれる思いをしつつも教育現場から去る教師がいても不思議ではないと思うのは筆者だけででしょうか。

人生の残り4分の3は確かに生物学的には絶頂期を過ぎ、さまざまな能力が低下し、いずれ生命体から無生命体になる期間であります。学校教育でさまざまな知識・技術の他、集団生活での振舞い等々を身につけた学び人は学校の囲いの中から外界の社会に飛び出し、社会の一員としてさまざまな時と空間で活動するようになり、やがて指導者（教え人）として後に続く若者を育てるといった期間であります。また、医療機関

や生涯学習機関などではさまざまなスキルを身につけた人が教え人として、対象となる学び人の心に通じるコミュニケーションを展開している期間でもあります。さらに近年の日本経済の発展に貢献してきたという自負を持ちつつも、昨今加速する核家族化や社会保障費負担増などから若年層や政府に疎まれている?! 団塊世代の高齢化の中、「人生は勉強、勉強」といって人生を振り返りつつ、さまざまな事象に貪るようにチャレンジする、老年的超越の域に達したお年寄りが躍動する期間でもあります。また、何人も避けることができない死を意識し、自身の人生を振り返る「心」(終活)が湧き出る期間でもあります。

人生はよくマラソンに例えられますが、「学校教育」は、マラソンでいえばスタートから10kmまでの距離でまだまだ集団のなかでその日の体の調子を計りつつも、指導者によって設計されたレースを無我夢中で実践していく区間に相当し、「社会教育」は、競争相手との駆け引きを考えながら勝負どころを計算し、特に終盤30kmからは体の極端な消耗を感じつつも、指導者、家族や沿道の声援をバックにゴールを目指し、無事42・195kmを走り終え、フィナーレを迎える区間といえます。もともと、「学校教育」から「社会教育」まで幅広くIT化が普遍化する時代になれば、ランナーの「ビッグデータ」をもとに、スタートからゴールまで走っているランナーの科学処理した映像からリアルタイムでスポーツ医学の専門家とマラソンコーチによって分析され、沿道からの指示に従ってランナーが走ることになり、世界記録が続発というシーンを目の当たりにする時代がくるかも知れませんが――。

そこで本書では人格形成を担う「家庭教育」で奮闘される教え人、時代の変遷に伴い大きく変貌しつつある教育内容や教育現場に苦慮しつつも「学校教育」で多くの人々の人生を導き、将来、社会で活躍するため

のさまざまな知識・技術などを教授する、各ステージにおける教え人、医療機関や生涯教育機関の中で展開する教え人と学び人のコミュニケーションをはじめとする「社会教育」における教え人、さらに「心の教育」に携わっておられる教え人の方々に教育の現状と将来、教育はどうあるべきかについてそれぞれの立ち位置から執筆していただきました。読者の皆さんご自身のこれまでの人生における「教え人」と「学び人」とのコミュニケーションを思い出していただき、これからの人生の過ごし方を考えて頂く端緒になれば望外の喜びであります。

なお、本書出版にあたり、執筆者推薦の労をおとり頂いた、富春院・ご住職の鈴木眞道氏、宮城教育大学・副学長の石沢公明教授並びに丸和バイオケミカル株式会社・代表取締役の井上進氏に感謝申し上げます。

2016年1月

長谷川 宏司

「教え人」「学び人」のコミュニケーション

目次

はしがき

長谷川宏司

i

家庭における「教え人」「学び人」のコミュニケーション

自然豊かな田舎町での子育て教育

よちよちカルガモの母

2

学校における「教え人」「学び人」のコミュニケーション

せんせい ぼくたちが そだててあげるよ

若林 卓実

12

中学校教員になって

貉川 春香

20

高校理科教育について

東郷 重法

29

若手教師の立場から教育を考える

徐 広孝

37

教員という仕事をして

貉川 喬

47

特別支援学校の仕事とその魅力

佐々木健太郎

55

放送大学とともに学ぶ

丹野 憲昭

64

100億人時代の食料生産に貢献する農学実習教育の苦悩と希望

林 久喜

73

人間形成とジェンダー——歩みを照らす光を求めて——

天童 睦子

81

大学に於ける音楽教育の喜びと苦悩

岡村 重信

89

理論と実践を往還する教師教育

田幡 憲一

98

大学院生および外国人研究者受入れの観点から	上田 純一	107
社会における「教え人」「学び人」のコミュニケーション		
リハビリテーション	書田 佳世	118
企業内教育(研修)の現場から	高原 要次	126
生涯教育・パソコンの使用方法	藤井 孝伶	135
医療における教育	吉森智香子	143
書道・書写を通じた学校教育と生涯学習	鳥塚 篤広	151
宗教における「教え人」「学び人」のコミュニケーション		
禅仏教への私の歩み——ラ・サールボーイの禅修行——	松下 宗柏	162
「教え人」「学び人」のコミュニケーションあれこれ	長谷川宏司	174